

晩成社の渡辺カネとアイヌの人びと

— 昭和9年の小学校講演を中心に —

The Ainu and Watanabe Kane of Banseisyu
— In Connection with her Speech at an Elementary School in 1934 —

広瀬 龍太*
Ryuta HIROSE

はじめに

本稿の目的は、晩成社のいわゆる「三幹部」（依田勉三、渡辺勝、鈴木銃太郎）ともっとも深いつながりのある女性、つまり勝の妻であり銃太郎の妹にあたる渡辺カネ（旧姓鈴木カネ、1859／安政6—1945／昭和20）^(註1)が、昭和9年3月19日に帯広尋常小学校（以下、帯広小学校と記す）でおこなった講演の筆録を紹介すると同時に、その筆録にあらわれた彼女とアイヌの人びととの関係を考察する点にある。

晩成社は拓聖・農聖とも呼ばれる依田勉三に代表される傾向がきわめて強いが^(註2)、高倉新一郎氏の指摘のように「女によって、もしくは女の助けをかりてこそ、真の開拓史が掘り出される」^(註3)とすれば、カネについての調査・研究は今後さらに進められなければならないであろう^(註4)。

カネの講演の筆録は平成12年に死去した筆者の父広瀬龍一（以下、広瀬と記す）^(註5)の遺した書類のなかに保管されていた。広瀬は当時帯広小学校に勤務し、後年「帯広市史」の編纂等郷土史の研究に携わった棚瀬善一氏等とともに同小の尋常6年女子クラスの担任をしていた。講演の記録は原稿用紙10枚に広瀬の自筆で記されている。

講演の内容は広瀬自身が冒頭で述べているように、「筆記」という制約がある以上、「渡辺老刀自のお話であるとは正しくは言へない」のは当然である。カネの講演要旨や微妙な言い回しが紙面に正確に伝わっていないおそれも十分に考えられる。しかし、「其のまま埋もれ去るのも惜しい」ため記録に残されたが、とりわけ開拓初期におけるカネとアイヌの人びとの関係を述べた部分は、いま考察にあたいすると思われる。

カネは生前郷土史家や満蒙開拓の推進者、戦中・戦後の本道開拓の関係者など異分野からの多数の人びとの訪問をうけ、生き証人としての聞き取りや講演に応じていたが^(註6)、その記録は筆者の知るかぎりあまり多くはない。本格的な聞き取りとしては、わずかに「注4」（「付説2」）に記載した若林功氏の「農業開拓秘録」のみではなからうか（若林氏の聞き取りは昭和12年8月22日に行われている）。

明治23年にオベリベリの渡辺家の開拓小屋を突如訪れて3泊させてもらったイギリス人ランドーは、渡辺勝・カネ夫妻の印象記を真情にあふれた興味深い筆致で書いているが、そのなかで夫妻が「最初のうちこそ原住民との間にいざこざもあったが、今では皆に敬愛され」と記している^(註7)。ちなみに「放浪記」で一躍有名になった林芙美子も昭和9年にカネ宅を訪問しているが、その後の旺盛な文筆活動のなかでカネについては一言も触れていない^(註8)。

カネ自身は自分の体験を記録にのこすことはなかったようである。彼女の孫の渡辺洪（1927-1997）氏によれば、「カネ自身の手紙は武平、ソイノ（筆者注、洪氏の両親）や吾々孫宛のもの数十通あり

*元函館工業高等専門学校勤務

ますが手記らしいものは少なく自身の事についてのものは殆ど見当たっておりません^(註9)と記している。

昭和9年という早い時期におこなわれたこの講演の記録を紹介し考察するまえに、講演会の開かれた背景をみておこう。

1. 講演の背景

講演のおこなわれた前年の昭和8年4月1日に、帯広町には北海道7番目の市制が布かれた。明治16年の晩成社入地を開基の元年とすれば、開基50年にあたる年である。そして講演のおこなわれた翌9年は、帯広小学校の創立40年にあたり、7月には記念式および記念事業が計画されていた。

帯広小学校は十勝国では海岸部の茂寄村広尾小、大津村大津小（両校とも明治14年創立）に次ぐ3番目、内陸部では十勝最初の小学校として明治28年に創立、翌29年7月15日に児童数38人で開校した。「北海道殖民状況報文 十勝国」は帯広小学校の開校を記述したあと、十勝国の教育状況を次のように報告している^(註10)。

「……爾後移民ノ増加ニ従ヒ数所ニ小学校ノ設ケアルニ至リシモ土地ノ広大ナルニ比スレハ学校ノ数尚甚タ少ナクシテ未タ普ク児童ヲ就学セシムル能ハス明治三十一年末ノ調査ニヨレハ学齡児童ニ対スル就学児童ノ数ハ百分ノ二十二余ニ過キス之レヲ本道諸国の就学児童ノ割合ニ比スレハ実ニ最低下ニあり……」

しかし「報文」に記された杞憂は解決されていく。わずか50年たらずの開拓のあいだに、十勝の教育界も、旧土人学校の問題をはらんではいったが、充実発展していった。開校40周年を迎えた昭和9年に、帯広小学校は37学級、2,500名の児童数を擁する大規模校となり、文字どおり十勝教育界の中心校となっていた。

市制施行・開基50年・開校40周年を背景に、学校が十勝開拓の先覚者の体験を児童に語り継がせたい機会をもったのは容易に推測できる。晩成社の3幹部はみな大正末期に他界している。この時点で実体験をもつ主な生存者は依田勉三の妻リク（明治27年に勉三と離婚。勉三の危篤に際し大正13年11月に来道、30年振りに勉三と対面。勉三は翌年死去）と渡辺カネの二人だけであった。郷土史家の萩原実氏は講演の開催年と同じ昭和9年の10月にリクから「追憶談」を聞き書きしているが^(註11)、それは伊豆でおこなわれたと推測される。講演者として、帯広在住で晩成社と運命をともにしたカネほどの適任者はほかにいなかった。カネはリクの3歳年長の76歳であったが、講演の要請を快諾したのではなかろうか。カネは教育者としての一面をもっていたからである。帯広小学校の百周年記念誌には下記のように記されている^(註12)。

「晩成社の夜学塾は帯広教育の源流であり、その教授の渡辺カネは教育者として、開拓者、主婦としても、十勝の原野に咲いた一輪の花であった」

カネは晩成社の一行に数ヶ月遅れ、明治16年10月17日に父の鈴木親長と勉三の弟依田文三郎とともにオベリベリに到着した。そして、横浜港を出航してから一月ほどの長旅の旅装をとくと2週間もたたぬうちに、私塾（寺子屋）を開いている。「渡辺勝・カネ日記」には下記のような記録が簡潔に記されている^(註13)。

「二十九日 月 晴風 木挽 今夕ヨリ金造（註・金蔵）広吉（註・山田）アイランケ（註・前出のウエンクトレの養子、コサンケアンの義弟）等来 書ヲ学ブ 兼教授ス」

文中の「兼」とはカネのことであり、金蔵は14歳、山田広吉は17歳、アイランケは11歳のアイヌの少年で、この後生徒数は増えていくが、後に帯広町議になった金蔵（山本金蔵）は、「本道農家及び子弟に簡易農業教育」を授けることを目的として明治19年の内閣書記官金子堅太郎の提言によ

って設立された札幌農業学校の農芸伝習科に合格しているが^(註14)、カネはこの教え子の活躍を若林功氏をまえに喜びをもって回想している。この青年の送ったわずか3粒の豆が、やがて十勝に普及し今日の長鶉(うずら)豆となっている^(註15)。カネには横浜時代に教育者としての経験があり、これが帯広での教育活動にも役立った。カネは福沢諭吉の娘や姪も入学した日本でもっとも古い名門の女子寄宿学校である共立女学校を卒業したあとも、同校にのこり舎監兼助教師としての経験をもっていた。

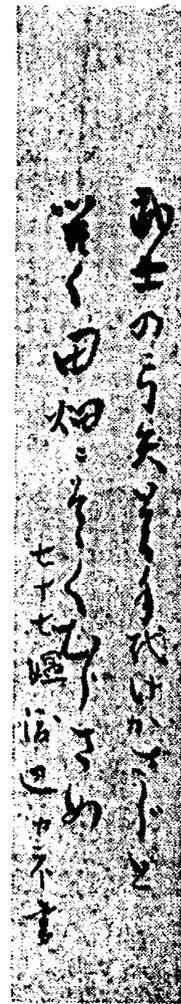
さらに、カネには帯広小学校との古い関係があった。同校の開校に際して、長女のイツミ(泉)と次女ナカ(仲)は同校に編入学(入学)している。兄の鈴木銃太郎の子息勇一も同校で学び、明治31年4月には渡辺泉等5名が第1回卒業生として同校を巣立っている^(註16)。

講演依頼にたいして、カネは胸にひとしおの感慨をもつてのぞんだのではなかろうか。講演はカネにとって自己の体験の真髄を児童に語る言わば「最後の授業」であった。

彼女は十勝の子供たちに何を語ったのか。そして講演から70年を経た今日、それはわれわれに何かを問いかけているか、それが次節以降の課題である。

2. 講演の記録

筆録者の広瀬は表紙に「昭和十年七月 帯広昔話」と表題をつけたあと、自分が記録をのこすにいたった動機を簡潔に記している。そのあと、講演者の渡辺カネを紹介した村瀬岩男校長^(註17)の話とカネ自身



渡辺カネ自筆の短冊

昭和十年七月七日、十勝毎日紙に連	載せし純物語りし日	廣瀬龍一	帯広昔話	此の昔話は昭和九年三月十九日に帯広市	華彦亭常小學校で卒業を前に於てカネ	児童約四百人のために、市内方べり	在化の七十七娘渡邊カネの留を招じて	廣瀬龍一氏の著述として書かれた時の筆記	とあり、筆記した古本は別にあり、残さ	うと思つたもので、はなかつたので、	頃大りそ午後に書いたかう渡辺カネの	お話であるとは正しくは言へないほどの	ものであるが、甚のま、埋もれ去るもの	惜しい故、出た大り、お話の筆記をし、	現させたい。尚當日現今者として前老を	つとめ、村瀬校長の話をカネ自ら理解す	るため、はなはだの故、是がその筆記が	う初め、筆はしよう。
------------------	-----------	------	------	--------------------	-------------------	------------------	-------------------	---------------------	--------------------	-------------------	-------------------	--------------------	--------------------	--------------------	--------------------	--------------------	--------------------	------------

講演筆録原稿

の講演が続く構成となっている。掲載した文は原文のままとしたが、現在あまり使用されていない文字にはルビを振り、文末の（附記）については^(注18)で説明した。なお、本文には愛奴・土人・酋長等の差別語があるが、原文のまま記載したことをお断りしておく。

昭和十年七月 帯広昔話

此の昔話は昭和九年三月十九日に帯廣市帯廣尋常小学校で卒業を前に控えた尋六児童約四百人のために、市内オベリベリ在住の七十七^{おな} 嬭^{とじ} 渡邊カネ刀自を招じて帯廣開拓当時の昔話をして貰った時の筆記である。筆記したる当座は別にあとに残さうと思ったものではなかったので勢ひ要項丈けを手帳に書いたから渡邊老刀自のお話であるとは正しくは言へないほどのものであるが、其のまゝ埋もれ去るのも惜しい故出来る丈けお話の筆記らしく再現させたい。尚當日紹介者として前座をつとめた村瀬校長の話は老刀自を理解するためには恰好のもの故先づその筆記から初める事にしよう。

昭和十年七月六日、十勝毎日紙に連載せし続物終りし日 廣瀬龍一識

其の一 村瀬校長のお話

渡辺カネさんは安政六年の四月十四日に江戸の屋敷で生まれた。父は鈴木親長という信州の武家であるが維新の際歸農したのである。カネさんは横濱で開校されたミッションスクール、今の共立高女に入学したのであるが此の女学校の経営者であった米国婦人の献身的な愛に感激して生長の後に事をなすべきを誓った。同校を卒業の後通辯^{つうべん}や舎監をしてゐた。

丁度此の頃は北海道開拓の氣運が猛然起きた時代であつて、明治十四年伊豆の豪家依田氏は北海道視察の途に上り明治十六年開拓団体である晩成社を擧げて十勝に移住する事になったが一行の中には鈴木親長氏も加入してゐた。此の時カネは二四五歳であつたが父親長氏は「あゝお前が男であつたならなあ」と嘆息を漏した。女史は此の時堅い決心を抱いて進んで一行に投ぜんとし晩成社の一員たる渡辺勝氏に嫁した。社の三幹部の一人は夫であり一人は兄鈴木銃太郎氏である。

横濱^{かいらん}を解纜してから函館を経て大津に着きオベリベリに入地した。農作物とは何もなく飢餓が迫り粟稗^{あわひえ}ウバユリその他のものをたべた。はじめは農業に専念してゐたが蝗害^{こうがい}があつてからは畜産に主力を注いだ。しかし之ととも鹿角をあさる人が野火をつけてしまったので此のために悲惨な結果を招来し、帰郷せんと志を抱く者が多く出た。

「かねさん、もう見切をつけようではないか。どうせ死ぬなら内地の皆のゐる所で死なねば浮かばれぬ」と言う。

「歸りたければ歸りなさい」と言はれても衆は目に一丁字^{いっぺいじ}無き故女史なくんば歸れない。この歸心矢の如き社員に対して女史は言ふのであつた。

「私は父に約束して居ります。もし皆さんが米がたべられぬから郷里に歸りたいといふのであるならば此處で米が出来る様にしませう。芝居が見たければ芝居が見えるようにしたらよいではありませんか。農家がたくさん入れば市街が出来ます町が出来ます、さうしたら芝居小屋も建つ様になるでせう。」斯う言つて之のお婆さんは若い見空^{みそら}で内地人の一人も入つてゐない帯廣の地で木を倒し草を薙いで田畑を開き今日の立派な帯廣の市をつくる基礎をつくつて下さつたのであります。

其の二 渡辺カネ刀自のお話

私共が初めて此處へ参りました時の晩成社は二歳から六十歳近い者が三十二人あつたのでありまして、之が十勝へ三回位にわかれて参りました。はじめてこちらに参る時、

「よい土地があるのに惜しい」と申しますと

「あーあの蝦夷の事か。日本の北のはづれに寒いいやな國があるんだな」と一般人は言ったものであります。此の北海道へ依田勉三さんは五十余年前に来道したのであります。依田さんは伊豆の大金持大地主であったのでありますが、晩成社をつくるために東京名古屋辺にも遊説いたしました。自分の村の人にも説きました。

「若旦那さんぢゃあ連れて行ってください」と言う希望者をもってつくり上げた晩成社はいよいよ十勝へ入りました。最初二個年分の食糧を用意して参りましたが来て見れば何もとれない。「旦那さんはうそを言った」と言って皆が不平を申します。

大津へは丸木舟で下りますけれども冬は利別から下流は凍るから船が利きません。勢ひ食糧が不足しまして御飯の代りに雑魚ざさこをたべました。おかずに魚をたべるのはよいけれ共御飯の代りにたべるのは仲々つろう御座います。

之に加へて蝗いなごがひどく湧いて害を與えたのであります。萬物の靈長たる人間が虫にまけてはたまらないと言って幼虫を取って殺したり卵を集めて焼きますけれども仲々そんな事では亡びません。これが明治十七、十八、十九年の事でありまして、明治十九年には廣尾原野に参りましたが其の九月にはひどい霖雨りんうが降り蝗虫こうちゅうが飛べません、之の長雨のために全滅したのであります。人事を盡して天命を待つと言ふ言葉がありますな、あの蝗虫の死滅した時はつくづく之の格言を思ひあたったのであります。

鹿の角の事を申し上げますと、當時の十勝は何百年間といふものは春芽が出て秋に枯れたのが年々腐ってつもって行ったものであります。此の中に鹿の角が落ちてゐたのであります。私共の入りました当時は此の鹿の角がガサガサ落ちて居りまして之を拾ひあつめ大津へ丸木舟で送りました。之は骨粉にしたとか申すことであります。しかし実物の鹿はそんなにゐたのではなく川へ水を飲みに来たのを見た位であります。

狐やムジナは居りました。商人はよく狐の皮を賣つて呉れと申したものであります。私共は愛奴アイヌから聞いたおとしで獲りました。はじめは獲つた狐の皮を只着てゐたものであります。後には一枚三十五錢四十錢で賣りました。手拭一本と取りかえた事もありました。狐の皮で顔は洗えませんからね。鮭は中學校の湧水へは入りましたが水光園の枝川へは入りませんでした。山本と言ふ爺さんは鮭が跳ねてパンパタンといふ音がやかましくて寝られないと言ふので堰せきをつくりましたが鮭はそれを跳ね越したものであります。これは十一月十二月にはホッチャリとなり河原に澤山さらされてゐたのですが、鷹よりも少し大きい鷺つが十羽から二十羽位も群れて来て啄ついたものであります。當時は馬車がありませんので手細工の小さい檣そりに乗せて家に運び之のホッチャリを豚にやつたものであります。尤も肉のよい部分は茹でて軒先にさらし塩をつけてたべたものであります。乾いたのを薪の様に積んでおきました。夜狐が来てそれをがりがり齧かぢりました。

ある時狐の尾ほしゆに宝珠の玉のあるのを見た事があります。家の前かがやにある夜のこゝ五六匹の狐が参りまして其の中の一匹はちゃんと番をして居ります。しかも其の番狐の尾がピンと尾を立て、尾には昔からの話の通りに宝珠の玉があるのです。あれを獲りたいと思つて夫を起しました。夫は鉄砲を持って戸外に出て狐を狙撃しましたが狐は倒れました。それと同時に宝珠の玉はなくなつてしまつた、これこそ本当の玉なしです。いろいろ考えた末、尾を撫かであげると玉ができるのだがそれが月の光に照らされて耀くのだとわかりました。

當時のオベリベリはアイヌの都でありまして大分アイヌの戸數もありました。飢餓の時札幌県へ願つて農業を教へましたけれど生活出来ぬ者は音更伏古毛根等へ移りました。當時のアイヌは和人を嫌つて居りまして、和人を無礼な奴猛獸の様な者だと思つて居りました。土人の戸數は三十戸足らずあつたのですが十勝おてな総乙名はオベリベリにありました。アイヌは我々晩成社の者が入地したのを見て

「今迄の掠奪者は掠奪すると立去ったからまだよかったが今度のは土着したのでよけい恐ろしい」と言ってオベリベリを逃出してしまった。それでも酋長一人丈は^{さすが}流石に弱味を見せまいと思ったのでせうか、たった一戸丈け立留ったのであります。

晩成社の幹部三人は手土産を持って酋長宅を訪ねさうしてアイヌと和人の相互扶助を約束しました。総乙名は同族を呼集めたと見えて何処からかアイヌが出て来ました。これで和人とアイヌとは仲が好くなりやっとアイヌから人間として認められました。

社員が一度雪融けにゴミを焼いたのが延焼しまして野火になりました。アイヌは

「さあ大變、やっぱり駄目だ」

と言って又オベリベリを逃げ出しました。今度は酋長も和人の心中を疑ひました。それで又依田鈴木渡辺の三幹部は連立って酋長宅に詫に行き、「十三になる子供が火いぢりをして失火したのだから許して貰いたい」と言ふと、酋長は

「アイヌは火を非常に大切にする。どうぞ和人もアイヌの様に火を大事にして呉れ」

と言ひました。アイヌが和人を見る事大体此の通りで、若し子供が悪戯をすると

「シャモにやって仕舞うぞ。あんな馬鹿になったらどうする」と言ったものでした。

—終—

(附記) このお話がおはった時、別室で女史父上鈴木親長氏作の「^{ものぶ}武夫の弓矢とる手をけがさじと」の短歌を書いて貰った。^(註18)

3. 渡辺カネとアイヌの人びと —講演記録から読み取れること—

講演記録の前半は開拓史とりわけ十勝のそれに関心をもつ人にとってはすべて周知の事実である。すなわち、晩成社の耕夫の募集・入地以後の彼らの失望と不平、それにとまなう一部離散・乏しい食糧事情・入植直後の蝗害と霖雨による壊滅的被害等の記載である。さらに、原野の動物たちすなわち鹿皮・狐とムジナ・鮭とホッチャリ・狐の宝珠の話もわれわれには馴染みの話である^(註19)。

小論の考察対象は、後段の「当時のオベリベリはアイヌの都でありまして……」以下である。該当部分は800字にも満たないが、その内容は前後を若干入れ替えると下記のようにまとめられる。

- (1) 「当時のオベリベリはアイヌの都」で、戸数は三十戸たらず、十勝総乙名はオベリベリに居住していた。
- (2) 当時のアイヌは和人を嫌い「無礼な奴猛獣の様な者」とみなし、悪戯をする子供に「シャモにやって仕舞うぞ」と言ったりした。
- (3) アイヌは晩成社の入植・定住にたいして、従来の言わば一過性の略奪者以上に、「土着したのでよけい恐ろしい」とみなし、オベリベリを逃げ出し身を隠す者もいたが、「酋長一人丈け」はとどまった。
- (4) 三幹部は手土産をもって長老宅を訪ね、相互扶助を約束したため、隠れていたアイヌは姿を現した。これで、和人は「アイヌから人間として認められ」た。
- (5) その後の失火により、アイヌの晩成社にたいする感情は再悪化したが、三幹部が再度詫びた結果、「和人もアイヌの様に火を大事にして呉れ」と言われた。
- (6) 飢饉のときにアイヌに「農業を教え」たが、「生活出来ぬ者」は他の土地へ移住した。

以上の諸点は、現在、日時の特定期間など仔細な点を除くとおおむね史料や文献の語るところと一致する。たとえば、(1)と(3)の長老モチャロクの動向、(3)と(4)の長老と晩成社の話し合い、それにとまなうて逃げ出したアイヌの帰還、(5)の失火、(6)のアイヌの危機的生活状況（主として天災や乱獲による鹿

の減少や鮭漁禁止等による)と旧土人開墾事務所による勸農策等である。小論では、これらの個々の史実の実証ではなくて、カネのアイヌ観に焦点をあててみたい。

上記の(6)を除くと、(1)から(5)までの視点の中心はアイヌにおかれている。そこにはアイヌの和人観とアイヌが主導権をもった小宇宙が断片的に述べられている。アイヌの都であるオベリベリの世界、闖入者の和人がアイヌの下位におかれた世界である。それはきわめて短い期間ではあったにせよ、「差別」という人間の上下関係を示す言葉を使えば、アイヌがシャモを差別していた期間、力関係において前者が後者に優越していた期間である^(註20)。カネは児童を対象とした講演のなかであえてこの時代について語った。

カネがアイヌモシリへの侵入に罪意識をもっていたか否か、アイヌに深い敬意をもっていたかそれとも蔑視していたか……これらについて明確に断を下すことはできない。二者択一を問う設問自体が不適切かもしれない。しかし、カネがアイヌの人びとをどのように見ていたかについては、ある程度アプローチできると思われる。

カネのアイヌ観の形成の背景には次の3点があげられる。それは何よりもまず、(a)松前藩や明治政府・開拓使、悪徳商人とは別の大地に生きた開拓者の生活体験からうまれたアイヌ観である。それはアイヌの人びとから生活の知恵の伝授を受けてはじめて死線を越えることのできた開拓者の体験の結晶である。ここから開拓者のアイヌへの恩義と親アイヌ観、さらにアイヌの人びととの「共生」観に昇華される可能性がうみだされる。このことは民衆史の側面から検証されよう。たとえば、旭川の開拓農家に生まれ幼児期にアイヌの古老に可愛がられ、後年常呂遺跡の発掘に貢献した大西信武氏は、「シャモはどんな人でも多かれすくなかれ、アイヌのお世話になりながら開拓をすすめることができたのだ。いまアイヌはだんだんシャモ化し、シャモはアイヌの恩を忘れてしまっている。ともにまことに残念なことである」^(註21)と回想している。明治16年5月にオベリベリに入植した晩成社27人の一員である山田セイ氏(入植時27歳)も孫や曾孫に語る昔話の結びは常にアイヌへの感謝のことばであった。「おまえが大きくなって暮らしに余裕がつけば、困っているアイヌ民族に恩返しをするんだよ」と再三語り、曾孫のひとりはその遺訓を実現している^(註22)。カネのアイヌを見る眼も大西や山田と同じ座標に位置し、それが児童へのメッセージとなったのではなからうか。

次いで、(b)横浜時代に外国人宣教師から教えられたキリスト教を礎としたカネの人生観ないし世界観が考えられよう。司馬遼太郎氏は「松前藩の場所請負制がアイヌを搾取しぬいている現状を憤り、アイヌの境涯に対しではげしい同情をもった」松浦武四郎を「キリスト教によらざる人類愛の人」^(註23)とみなしている。これにたいして、カネの場合は「キリスト教に根ざした人類愛」に立脚していたと言えよう。若林功氏の開拓生活に関する聞き取りの一節を下記に引用する^(註24)。

「著者(若林)は最後に(開拓生活で)『宗教の力はありませんか』ときくと

『八割迄は宗教の力です。神様の御加護です。別に集会などはしませんでした。日曜日毎に僅な時間を作りバイブルの研究をしました』と謹厳な態度で答えられた。」

カネはキリスト教の教えを内に秘めながら移住し、その信仰は終生変わることがなかった。父親長と兄銃太郎の棄教にたいして、カネはキリスト教信仰を守り、葬儀も昭和20年に帯広の日本基督教会で行われている。開拓生活を内面から支えた「宗教の力」はカネのアイヌ観の形成にも無関係であったはずはない。

横浜共立女学校時代に、カネ自身差別の問題に直面したに違いない。明治4年にアメリカ人の女性宣教師たちによって創立されたこの学校は、幕末から明治にかけて外国人と日本女性のあいだに生れた混血児の救済をひとつの目的としていた。カネは明治8年の入学以来(9年以降は寄宿舎生活)7年間この学校に在籍・勤務し、「アイノコ、アイノコ」と差別されていた混血児と接触する機会が多

く、一方では恩師ルーズ・H・ピアソン校長の差別を完全に否定し、すべての生徒を平等に愛する熱烈なキリスト教教育を肌で体験した。一方、「異人館」に住み、明治6年のキリスト教禁止の高札撤廃の三年後に受洗したカネ自身にも、世間から白眼視ないし差別の眼がむけられることがあったであろう。この横浜時代にカネに「新しい精神の誕生」が生まれたのである^(註25)。そしてこの精神が開拓生活を一貫して継承され、彼女のアイヌ観の形成にも寄与した。

さらに、(c)カネの実兄や夫の影響も考慮される必要がある。カネの実兄鈴木銃太郎は明治19年5月8日に長老モチャロクの娘コカトアンと結婚し、長男勇一をはじめとする子供たちにめぐまれた。つまり、カネの甥と姪である。銃太郎は「この妻に“常磐”という名をつけて人に会えば“わが輩の女房は常磐御前”だと冗談まじりで語っていた」^(註26)という。小室吉助氏は「銃太郎はアイヌ人の仲間と同化したとさえおもわれるのである。貞節な常磐夫人を妻に迎えられ生涯苦業を共にされた」^(註27)と述べている。

銃太郎よりもさらに強い影響力をもったのは夫の渡辺勝であろう。「渡辺勝・カネ日記」のなかにはアイヌの人びととの交流が随所に記載されている。勝の率いた海上隊の一行が帯広に到着した明治16年5月14日の翌日に、晩成社の三幹部は「オテナ（筆者注 長老のモチャロク）ノ家ヲ借り社事ヲ議」している。この日以来、明治16年に限っても、小屋掛け・親睦の会・カモイノミ等がアイヌとの間でおこなわれ、「初メテ鮭魚ヲ賞 味極メテ美ナリ」とか「アイランケ（筆者注 アイヌの少年の名）同伴ブドウ採ル」の記事も散見される。この日記の編註をおこなった小林正雄氏によれば、勝と「アイヌたちとの間柄は、終始してきわめて緊密」であり、アイヌの飢饉に際しては援助の手をさしのべる一方、渡辺家に入出入りするアイヌにたいして「指導者として一段上から臨むのではなく、対等の友人知己として接触」し、「自然な態度でアイヌたちと親しみ、ことさら勤めたり構えたりしない点が勝の特性であったかもしれない。その故に彼は、ニシバ（親方）と呼ばれはしたが、アイヌに君臨して利をむさぼる型の親方にはならなかった」^(註28)と述べている。幼少時より父から「三従の教え」をくりかえし説いて聞かされて育ったカネは、夫の勝の影響を受けなかったはずはない^(註29)。カネの内からうまれた親アイヌ観は、夫の影響によってさらに強靱なものに補強された。明治21年9月、北海道庁の殖民地撰定主任の内田澁が訪ねて来たとき、当時29歳のアットウシ姿のカネはアイヌの老婆に間違えられ、1歳に満たない次女は「髻の土人には喜んで抱かれてもシャモの内田さんは異人かのように怖れて抱かれなかった」という逸話ものこっている^(註30)。この逸話のなかに、カネ一家も銃太郎一家に似てアイヌとの共生に近い生活をおくっていたことを窺うことができる。

渡辺洪氏の証言によれば、渡辺一家の農牧の作業は開拓当初アイヌの人びとに負うところが大きかったし、後年の然別時代には渡辺家では「メイ」というアイヌの少女を住み込みで手伝いとして雇い、「吾が子同様に可愛がり」同家から嫁にだしている。カネは「アイヌの風習・信仰は理解し、尊重していた」し、「アイヌの踊りやカムイノミに参加したことはある筈」、そして「アイヌ語は相当に話せた」と証言している。昭和初年、唇のまわりにイレズミをした近所の少女が川魚を売りにきたとき、カネがアイヌ語で応対したら、少女は『私、アイヌ語は良く判らないんです』ともじもじしていた」という逸話も伝えられている。アイヌ民族への差別の有無について、洪氏は「これは難しい質問ですが、少なくとも蔑視・酷使はしなかった。只貧しく無力な人たちなので哀れみの眼はあったと思う。また開拓のためには得難い味方と考えていた」（ママ）と証言している^(註31)。カネにとって、アイヌの人びとは良き隣人^{となりびと}であったと言えよう。

結びにかえて

以上、三つの視角から、カネのアイヌ観の形成について考えてみた。もとより、カネ自身「時代の子」である。洪氏の証言が正しければ、「貧しく無力な人たちに哀れみの眼をもち得難い味方」《傍点筆者》とみなした側面はあろう。昭和11年の陸軍特別大演習に先立つ天皇の道内行幸で、カネは「女乍らも特別奉拝を差許され」、その後3幹部の墓前で奉告祭を営み「暫し追憶の涙にかきくれ」ている^(注2)。昭和13年前後には、加藤完治をはじめ「満蒙開拓青少年義勇軍」関係者のあいつぐ来訪にたいしても協力を惜しまず、朔北の地の開拓体験を語ったことであろう。「熱烈な天皇制的農本主義者」である加藤完治は、多数の青少年を「緞の戦士」の名において満州の荒野におくり多くの犠牲者をだした最高責任者である^(注3)。しかし、これらのことを考えても、渡辺カネは北海道の開拓期にキリスト教を内に秘め、アイヌの人びととの共生を実践しながら、農に生きた女性であった。帯広小学校の児童をまえにして語ったカネの講演にはその一端がのぞいていると言えよう。児童たちがどのような感想をもったかは知るよしもないが、開拓者の苦勞と同時に開拓当初の和人とアイヌの人びとの共生が存在した時代に認識を新たにしたい児童もいたのではなかろうか。この記録が「其のまま埋もれ去るのも惜しい」と記録にのこした筆録者の広瀬も、同じ認識のうえにたっていたのではなかろうか。

前世紀末ころから、世界各地で少数・先住民族の自立運動の昂揚や連帯のうごきがはじまり、先住民族への感謝の気持ちを想起したいという動きもある。アイヌの人びとと和人の不幸な歴史的関係を考えてとき、そして今なおこの問題が解決されていない現在、今から70年前に十勝の児童たちに語りかけた渡辺カネの講演は私たちに貴重な示唆をなげかけているのではなかろうか^(注4)。

(追記) 小論を書くにあたって、「凜として生きる」の著者加藤重女史と函館工業高等専門学校の中村和之教授にお世話になった。加藤女史からは貴重な資料を借用し、元同僚の中村教授からは多くのご教示をえた。末文ながら記して、感謝申しあげます。しかし、文責は言うまでもなくすべて筆者にある。

(注1) 小林正雄氏によれば「名前の『カネ』は戸籍面のもの、共立女学校の卒業証書は『可弥』になっている。ほかに『かね』『金』『兼』『於兼』『兼子』などの文字を用いた」とある(「渡辺勝・カネ日記」(p.69) 帯広市社会教育叢書 第7巻 昭和36年)。「北海道開拓功労者関係資料集録」(以下「開拓功労者集録」と略記)下巻(北海道総務部行政資料室編集 昭和47年。p.172)によれば、「旧姓-鈴木、本名-カネ」、「音更町史」(昭和55年。p.54)によれば、「本人は〈カネ〉としているが、戸籍では〈カ子〉」とある。本稿では「カネ」と記す。

(注2) 拙稿末尾の「付説1」参照。

(注3) 高倉新一郎「開拓と女性」(「郷土と開拓」柏葉書房昭和22年、p.102-103)。高倉氏はこのなかで、勉三の妻リクとカネについても言及している。なお、この著作の文献解題については、「高倉新一郎著作集」第4巻 p.533参照。開拓のなかで女性の果たした役割については、若林功「北方農業に輝く女性」(「北海道開拓秘録」第三篇《月寒学院昭和24年》所収)も参照。

(注4) 「付説2」参照。

(注5) 行論の必要上、広瀬龍一の略歴を記しておく。明治40年岐阜県揖斐郡北方村に生れ、大正6年3月家族とともに芽室村大字美生村字上伏古別に入植、帯広尋常小学校高等科を卒業したあと15歳で代用教員に採用される。その後札幌師範学校に進学し、卒業後芽室尋常小学校に勤務、その後広島高等師範に進み、昭和8年卒業後再び帯広小学校に勤務。昭和11年以降、道内各地の学校に勤務し、昭和43年函館北高校長を最後に退職。平成12年死去。開道百年に際し、道民のうたのホームソングの部で「むかしのむかし」の作詞が入選。後述するように、歌詞の一節の着想はカネの講演によっている。学校関係の記念誌等の編集にたずさわったほか、短歌関係の自費出版多数。そのなかで、「蝦夷詩歌巡礼」(釧路米内印刷 昭和28年)で晩成社関係者の詩歌をテ

一マとした『晩成社耕余吟』の項で、カネの講演に言及している。また帯広小学校の「創立四十年記念録」（昭和9年）では沿革史を担当すると同時に渡辺カネ宅の訪問記（昭和9年6月24日訪問）である『晩成社時代の教育』を載せている。

(注6) 渡辺洪（1927-1997）氏は、昭和8年ころから20年にいたるまで、カネが受領した訪問者の名刺のリストを作成しているが（未公開）、その数は60枚を越える。筆者は加藤重女史のご好意により、洪氏が女史にあてた資料を見せて頂くことができた。この資料を以下「渡辺家資料」と記す。

(注7) A.S.ランドー 前掲書（原著p.58, 訳書p.87）。越崎宗一氏は「外人の見たえぞ地」（北海道出版企画センター 昭和51年）の『あとがき』のなかで、外人の旅日記がしばしば皮相・誤解・思い違いにおちいりがちなことがあるが、「反面日本人の我々が慣れっこになりうっかり気附かずにいることを外人から鋭く突かれてハッと気をつくこともあるものだ」と述べている。ランドーは自著はアイヌが主題であるがゆえ日本人には必要最小限しか触れないと記しているが（原著p.206, 訳書p.270）、勝・カネ夫妻にはおおくのスペースを使っている。その一節を引用する。「私の人生において、渡辺夫妻ほど文明的で親切で、思慮深く寛大な人々に出会ったことがない。あえていえば、文明は未開人を悪に導き、未開の生活は文明人を善に導くのではないだろうか」（戸田祐子訳、訳書p.94, 原書p.65）

(注8) 林芙美子は昭和9年の北海道旅行を機に「摩周湖紀行」（昭和9年に執筆し、創元社の単行本『心境と風格』に所収）と小説「帯広まで」（昭和10年「文芸春秋」7月号が初出）を発表している。前者は「世界紀行全集」第一巻北日本篇（修道社昭和33年）、後者は「北海道文学全集」12巻で読むことができる。芙美子は前者のなかで、釧路で会った近江じん（啄木の愛人であった小奴）や地元の考古学者や歌人等の名を記載し、近江との写真は後年彼女の文学アルバムにも掲載されているが、カネについてはいっさい記述がない。芙美子とカネの記念写真は渡辺洪氏宅に保存されている。記述がないことについて、「ひらけゆく大地」では「カネがあまりにも立派すぎて、（芙美子）の興味をひかなかったのかも知れない」（p.170）と述べ、加藤重女史は「カネの話は開拓の苦しみや困難だけで、芙美子を刺激するようなロマンがなかったためであろう」（p.87）と推測している。いずれにせよ、二人のあいだには世代の違い（芙美子30歳、カネ75歳）以上に、出自や人生観・倫理観・宗教観等の違いがあったのであろう。

(注9) 渡辺家資料（平成6年2月7日付洪氏の書簡）による。

(注10) 「北海道殖民状況報文 十勝国」（『河野常吉著作集』北海道出版企画センター 昭和59年）pp.62-63

(注11) 萩原実編「北海道晩成社 十勝開発史」（高山印刷合資会社昭和12年 pp.6-8）。なお同じ文は同氏の「十勝開拓史話」（道南歴史研究協議会 昭和39年 pp.5-7）にも再録されている。

(注12) 「開校百周年記念誌 大樹抱雲」（帯広市立帯広小学校 平成8年）p.22

(注13) 「渡辺勝・カネ日記」（帯広市社会教育叢書 第七巻 昭和36年）p.20

(注14) 農芸伝習科については、若林功「農業開拓秘録」第2篇 p.326-332

(注15) 若林功「農業開拓秘録」第1篇 p.164

(注16) 「帯広市史」（昭和59年）p.716

(注17) 村瀬岩男氏（1897-1973）は金耕太郎校長の後任で帯広小学校の九代目校長。同校に14年間勤めた後、昭和28年から12年間帯広市教育長の任にあった。明治34年に岐阜県揖斐郡より河西郡売買村（現帯広市川西町）に入植した開拓農家の出身で、カネと同じくキリスト教信者でもある。帯広小学校の「開校百周年記念誌」の第一部第二編「人物クローズアップ」では、「帯広小の三櫛」（櫛は帯広・十勝を象徴する落葉喬木・かしわ）と呼ばれる金耕太郎・村瀬岩男・小室吉助の3氏におおくのページをさいている。

(注18) カネの父で、信州上田藩の藩学校の総裁までした鈴木親長の短歌は「武夫の 弓矢とる手を けがさじと ひらく田畑に そそぐ村雨」である。広瀬の「蝦夷詩歌巡礼」によれば、講演が終わってから広瀬が「お話の中にあつた歌を書いていただきたいと頼んだ。老刀自は短冊をとり上げ、さらさらと書きあげたのは次の一首である」と記述され、「七十七嬭渡辺カネ書」と署名された短冊の写真が掲載されている（小論p.3の写真参照）。なお、広瀬はこの短冊を後年帯広市立図書館に寄贈したと伝えられる。この短歌は「武士の面目を立つる為には朔北の地を開くのだが、貧乏で百姓とはなっても武士の魂はけがさぬの意を寄せた」（『農業開拓秘録』第1篇 p.166）。この短歌は、親長夫妻や銃太郎夫妻とその子供たちの眠る鈴木家之墓の「鈴木家略伝」の墓石にも誌されている（『鈴木銃太郎日記』p.13に掲載された写真を参照）。

(注19) このうち狐の宝珠の話は広瀬に強い印象を与えたらしく、昭和41年に作詞した「道民のうた ホームソン

グ」の第一節「むかしのむかし おじいさん くまざさ刈って かや刈って 開墾小屋を 建てました きつねが月夜に こんばんは こんばんは」の最後のフレーズはカネの講演から着想をえたと歌詞を解説した私のメモに書きのこしている。「この狐は昭和10年ころ(ママ)帯広小学校で聞いた話による。十勝開拓の草分け晩成社の三幹部の一人渡辺勝氏の夫人カネ刀自から聞いた話である。カネ刀自は明治十何年(ママ)かに横浜の共立女学校で学んだインテリで、鳩山薫子さんの様に上品な賢婦人であった。この70余歳の古老の思い出話を帯広小学校の6年生の女の子(ママ)にしてもらうことを村瀬校長に建議したのが容れられた。歯切れのよい東京弁で「開墾小屋の庭先へ狐があそびにきて尾毛で宝珠のたまをつくるのが綺麗でしたよ云々」とある。渡辺洪氏の「幼少のころ祖母が聞かせてくれた復物語り」を所収している「とかち奇談」にもこの宝珠の話は載っている。カネにとっても印象深い思い出であったのであろう。

- (注20) 三田マサ子「異質の血」(ノンフィクション集 北海道に生きて)北海道新聞社 昭和55年 pp.78-79)には次のような一節がある(傍点筆者)。「チヨたち姉弟は、コタンの娘たちから“お前なんかヨリ上がり者の血統のくせに”とののしられることがあった。その頃、まだ古いコタンでは“ヨリ上り者”と言ってシャモを馬鹿にしていた。アイヌの側から差別出来た時代もわずかながらあったのである。「ヨリ上り者」とは、こんぶや流木がヨレヨレになって浜に打ち上げられるように、東北の農家の二、三男や食いつめた者が木の葉のような小舟ののって日高等の浜に打ち上げられた者をさす。引用文中の姉弟の父も(静内のコタンの長老の娘と結婚するのだが)明治はじめに東北から静内に移住したシャモであった。明治開拓期の初期に、きわめて短期間ではあったが、十勝・日高を問わず、アイヌ主導の時期があった。
- (注21) 大西信武「常呂遺跡の発見」(講談社 1972年) p.94
- (注22) 堀内光一「軋めく人々アイヌ」(新泉社 1993年)所収の「晩成社移民団とコタンの人びと」(pp.269-275)を参照。山田セイさんの願いが曾孫によって実現される感動的な挿話が紹介されている。
- (注23) 司馬遼太郎「オホーツク街道」(朝日文庫 1997年) pp.397-398
- (注24) 若林功 前掲書 p.170
- (注25) 加藤重 「凜として生きる」の第二章「共立女学校」参照。
- (注26) 「芽室町八十年史」 p.35
- (注27) 「鈴木銃太郎日記」p.3。この書に序文を寄せている小室氏は「オベリペリにはアイヌ人より居なかったのである。オベリペリ時代の日記には必ずといってよいほど毎日アイヌ人との交流が記されている。その後入居した移住民もどれ程アイヌ人にたすけられたことか、異口同音に感謝の言葉を述べている」と記している。
- (注28) 「渡辺勝・カネ日記」帯広社会教育叢書 第七巻 p.68
- (注29) 加藤重 前掲書 p.17
- (注30) 若林功 前掲書 pp.168-169。この逸話は小林正雄氏によっても紹介されている。(「渡辺勝・カネ日記」帯広社会教育叢書 第八巻 pp.22-23)
- (注31) 「渡辺家資料」平成6年2月7日付の書簡
- (注32) 若林功 前掲書 p.165
- (注33) たとえば、上 笙一郎「満蒙開拓青少年義勇軍」(中公新書 昭和48年)、合田一道「夕陽と青春 満蒙開拓青少年義勇軍の記録」(恒友出版 昭和54年)参照。なお、「渡辺家資料」によれば、カネは「賛美歌はときどき口誦(ママ)んでいたが、何時も口にした言葉は『農は国の本なり』であり、この言葉の墨蹟も保存されているということである。
- (注34) 文芸評論家の菅野昭正氏は、「明治初年、北海道の静内に入植した和人と、アイヌの人々の努力と敗退」をテーマとした池澤夏樹著「静かな大地」の書評の冒頭で次のように述べている(「北海道新聞」2003年10月27日付)(傍点筆者)。「明治初期、開拓時代の北海道のかかえていた大きな問題は、本土から移住してきた『和人』と、長らく土地の住民だったアイヌ民族の関係にあった。表にあらわれた出来ごとを記録するのは、歴史の仕事である。新しい入植者とそれを迎える古い民が、それぞれどんな喜怒哀楽の奔流に揉まれながら難しい時代を生きていたか。歴史はそこまで見とどけられない。そのこまかな皺をさぐるのは、小説の仕事である。(以下略)。筆者は両民族の「喜怒哀楽」と「こまかな皺」を考察することも歴史の重要な仕事と考えている。

「付説1」

小論の目的は「三幹部」および渡辺カネの歴史的評価にはないが、次の点是指摘しておいてもよからう。周知のように、依田勉三は伊豆屈指の豪農依田佐二平（晩成社の大口出資者で、明治23年にわが国最初の衆議院議員にも当選）の弟で、晩成社の副社長の任にあった。勉三は明治25年に兄と同じように緑綬褒章、大正6年に本道最初の飾版を加授された。一方、国定教科書の「小学国語読本巻十一」にも十勝開拓の指導者として掲載され、その功績と名声は全国に浸透した。また、昭和16年6月22日におこなわれた依田勉三の銅像の除幕式の模様は、帯広放送局のマイクを通して1時間半にわたって全国に放送された。この時、井野碩也農林大臣は祝辞のなかで次のように述べている。

「今や祖国未曾有の聖戦完遂に当り、食糧の生産確保に益々飛躍進展を希求せらるる時機に際し、君が本道開拓の先覚としての偉業を偲び、その功績を永く後世に伝えんがため、ここに銅像の建設を見たるは、蓋し機宜を得たるものというべく、世道人心の作与に資するところ少なからざるべし。一言以って祝辞とす」（萩原実「十勝開拓史話」（道南歴史研究協議会 昭和39年）所収の『依田勉三翁銅像除幕式の記』および『依田翁の開拓創業を偲ぶ』を参照）

日米開戦を前に、農業十勝・畜産十勝の「飛躍進展が希求」されるとときに銅像が建立されたわけである。他方、勉三は高倉新一郎の著作「北の先覚」（北日本社 昭和22年）にとりあげられた36名のなかに加えられていなかった。堂垣内尚弘元北海道知事はこれにたいしてこの書の改訂版（昭和62年製作・北海道神宮末社開拓神社御鎮座50年記念大祭実行委員会）に37番目の先覚者として勉三をいれることを望み、高倉氏に追加執筆を依頼してその願いをかなえている（詳しくは「高倉新一郎著作集」第4巻の月報（1997年）、堂垣内尚弘『「北の先覚」改訂版に思う』を参照）。

誤解を恐れずに言えば、「勉三人気」あるいは「勉三神話」は小説（池田得太郎の「開拓者 依田勉三」、松山善三「依田勉三の生涯」）や映画（「新しい風～フロンティアドリーム～」は2003年から制作中）によっても増幅されている。

勉三に次いで知名度の高い（業績ではない）人物は渡辺カネである。前述の「開拓功労者集録」や「ひらけゆく大地」（『開拓につくした人びと 3』北海道総務部文書課編集 1965年）のような官製の出版物にも啓蒙書・児童書のなかでも、カネは勉三と肩をならべている。

これにたいして、渡辺勝と鈴木銃太郎は百科事典（たとえば「日本大百科全書」や「北海道大百科事典」）には記載されず、一般書にもとりあげられることは稀である。しかし、勝・カネ夫妻の孫にあたる渡辺洪（ひろし）氏は生前に開拓資料の整理保存を目的とした「十勝開拓資料室」を開設し、その機関誌ともいべき「とかち昔ばなし」等で、祖父母の顕彰につとめた。また、銃太郎については、田所武編「十勝開拓のパイオニア 鈴木銃太郎日記」（柏李庵書房 昭和60年）が出版され、銃太郎は「当時の実業家もしくは、国家の事業としての開拓とは性に合わない地味なものであったため、ほとんど忘れられたかに見えた」が、「真に十勝開拓のパイオニア」（高倉新一郎氏の同書序文）の姿が見出されつつある。

「付説2」

渡辺カネの生涯や業績に関する参考文献については、煩雑さを避けるために昭和50年ころをさかいに（I）と（II）に分けて概観する。

（I）昭和50年以前に出版された文献については、「開拓功労者集録」下巻の『参考文献』（pp.172-173）および「ひらけゆく大地」上の『参考文献目録』（pp.6-7）を参照。ただし、両書に掲載された若林功（1873-1958）氏の著作は、「渡辺勝・カネ日記」とともにもっとも重要な文献であるが、両書ともに誤記や不正確な箇所があるので、ここで解説をしておく。

若林氏は北海道の農業開拓の実情にきわめて精通していた。彼は札幌農学校を卒業したあと長年にわたって庁立空知農業学校の校長および北海道農会の幹事を勤め、その後八紘学院（のちの月寒学院）教頭の任にあったが、長年にわたって開拓者個人や団体からの聞き取りを続け、それを「北海道農会報」その他の雑誌に掲載した。それらはやがて「満州其他の開拓地を開拓せんとする我が民族には得難い参考資料」になることを願って、下記の書物として出版された（以下書籍番号を付す）。

- (a) 「北海道農業開拓秘録」第一篇（八紘学院 昭和15年）（小論では「農業開拓秘録」と略記する）
- (b) 「北海道農業開拓秘録」第二編（水産社昭和17年）

この2書は昭和24年に再版されたが、それは「我国敗戦後の食糧事情が新地開墾の必要に迫られ」た事情による。つまり出版目的が満州開拓から戦後開拓へと変化したため、(c)では本文の内容に変化はないが、書名の変更や満鉄総裁大村卓一の序言の削除、開拓者各人の写真の削除があり、そのため(c)のページは前掲書と若干異なる。なお、このとき新たに第三篇が出版された。以上をまとめると、

- (c) 「北海道開拓秘録」第一篇～第三篇（月寒学院 昭和24年）

さらにこの書物は昭和43年の開道百年を数年後にひかえた年に、加納一郎氏の改定（ママ）によって、表現や内容の配列を大幅に変え装いを新たに4分冊で出版された。これによって、やや統一性に欠けた原著は「適切に群別、改変」され、青少年にも読者層をひろげることができるようになった。

- (d) 加納一郎改定「北海道開拓秘録」1～4（時事通信社 昭和39-40年）

このように、若林氏の労作は時代の要請にこたえて版をかきかえながら、内容はきわめて精緻で唆暖に富む。十勝の開拓に限っても、たとえば「十勝大正村越前団体の佐竹佐作」（第一篇所収）や「十勝川西村の岐阜団体」（第二篇所収）は読者に感動を越えて戦慄をさえ感じさせるほどの迫真性に富んでいる。

晩成社およびカネについては、上掲書の(a), (c)の第一篇, (d)の2にその記載があり、カネからの聞き取りは(a)と(c)では「晩成社後聞記」、(d)では「晩成社老女物語」のタイトルがつけられている。カネに関する後年の記述の多くは若林氏に拠っているので、あえて多くの紙面を割いた。

(II) 昭和50年以降の出版物については、「音更町史」(昭和55年)、「芽室町八十年史」(昭和57年)、「帯広市史」(昭和59年)等の市町村史のほか、一般書も含めると主なものとして下記の書物があげられよう。あわせて若干の解説を付しておく。

- ・ A. S. ランドー著、戸田祐子訳「エゾ地一周ひとり旅」(未来社 1985年)。原著は、A. H. Savage Landor, "Alone with the Hairy Ainu" (London, 1893. 復刻版は New York, 1970)。この書の第7章(原著 pp. 50-67, 訳書 76-99頁)に、イギリス人ランドーの渡辺夫妻宅における訪問記が記されている。ただし、訳書の98-99ページの訳注2の渡辺勝の没年とカネの渡道した年代は誤っている。また「渡辺勝・カネ日記」の引用にも一部誤記がある。
- ・ 渡辺洪「とかち奇談」, 「続・とかち奇談」(辛夷発行所 昭和54・56年)。祖母のカネから聞いた寝物語も所収されている。
- ・ 加藤重「凜として生きる—渡辺カネ・高田敏子・坂本真琴の生涯—」(晩聲社1996年)。著者の加藤女史は東京女子大学を卒業後、カネの母校横浜共立学園の教諭をつとめた。「凜として生きる」はキリスト教的側面からカネの生涯を照射したカネの初の本格的伝記といえよう。
- ・ 「北へ…異色人物伝」(北海道新聞社2001年)。なお、この書の姉妹篇「続北へ…異色人物伝」(北海道新聞社2001年)の中に、渡辺カネの共立女学校(横浜)時代の校長であったルイズ・H・ピアソン(1832-1899)と北見市等で布教活動をしたアイダ・G・ピアソン(1862-1937)の二人を同一人物視するという誤りがある(p. 307)。したがって、同書の「異色人物相関図」(p. 305)も訂正されなければならない。